

宋・蘇東坡（ばいかしじよう梅花詩帖）

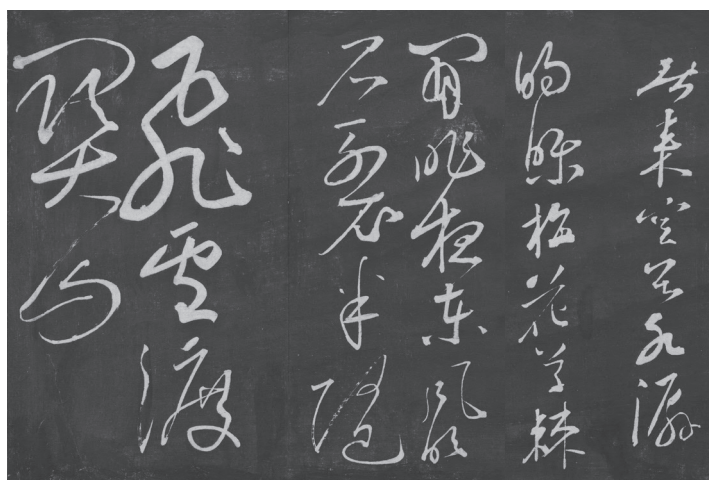
政治家としては浮沈多かつた蘇東坡。しかし、多くの詩文と書の傑作をのこし、今なお宋代文人の筆頭として別格の地位が与えられている。人情の機微に通じた自由な精神の持ち主であつた彼は、逆境にあつてもなお、たくましく生きぬくことの達人でもあつた。

四歳の子（蘇過）に衣服をひつぱられ、叱ろうとして不愉快な顔をしていると、妻にたしなめられた。自分が愚かだつたと思ひなおした時の詩がのこされている。生活そのものの喜びを見つめなおそうとして詠んだ「小兒」と題する五言古詩がそれである。

この詩の第五句、第六句では、妻の怒りを詩句に凝縮し、次のように詠む。「兒は痴おろかなるも君は更に甚はなはだし、樂はなしまずして愁うれうるは何なん為すれぞ」（「子供はおばかさんですが、あなたはもつとひどい、うれしい顔ばかりで樂はなしもうとしないのは何なんです。」）

王安石の新法を非難したことで、都の開封かいほうでの官を解かれて杭州こうしゅうの副知事に遷され、のち密州みしゅう（山東）に遷され、知事としてこの地にあつた時、熙寧八年（一〇七五）、四十歳の作とされる。反省している自分の前に、一杯めしあがれと妻が盞さかずきを差し出してくれた、という詩句がこれにつづく。

酒豪のイメージがある蘇東坡。酒を愛したことは確かなようだ。しかし、あまり飲めない人であつたらしい。盃に四五杯も飲めば酔いがまわり、雷のような大いびきをかいて寝込むのが常だつ



たが、目が覚めると風雨のように筆を走らせ、その書は神仙中の人が書いたような味わい深いものであった、という黄山谷の証言もある。

蘇過は第三子で、のちに蘇東坡が海南島に流されたときに随伴した一人である。台北の国立故宫博物院に尺牘が伝えられており、父親の書風に類似する。

ここに一部を掲げた蘇東坡の専帖（せんじょう）へ成都西樓帖（せいとうせいろう）に見られる狂草的な書は、まさに酔後の一筆のように思われる。肉筆として伝わる彼の書の中には、この種の草書体で一氣呵成（いっきかせい）に運筆されたものを見ない。その意味でも貴重な作例といえよう。

「春は空谷に來りて水は潺湲（せんぜん）、的磔（てきせき）たる梅花草棘（きよく）の間。昨夜の東風石に吹きて裂る、半ば飛雪に隨（したが）いて関山を渡る。」詩は元豐三年（一〇八〇）の一月、流罪の身となつて黄州に向かう途中の作。こ

れを詠んだ十日後には黃州の地に入っている。ただし草書によるこの作がいつ書かれたものであるかについては明らかでない。

三行目あたりから運筆に速度が加わり、最後の二行などは懷素や張旭の狂草を思わせる奔放な作風である。書き出しは冷静沈着、途中から加速を増して筆の動きが大きくなるというのは、感情の高まりとも関係していよう。〈黃州寒食詩卷〉や〈李太白仙詩卷〉などの行書の作品にも共通するものが見られる。

蘇東坡の題跋には、懷素や張旭など、草書をよくした唐の名家のことを述べた数条がある。中でも飲酒とのかかわりで張旭や王羲之に言及した『張長史の草書に書す』はよく知られている。以下にこの一文の福永光司氏による現代語訳を引用しておこう（中国文明選14『芸術論集』〈朝日新聞社〉「東坡題跋」所収）。

「張長史すなわち唐の張旭の草書は、いつでも酒に酔ってから書き、自分ですばらしい出来栄えだと思ふこともあるが、しかし酒が醒めるやいなや天真爛漫さも崩れてしまう。これは張長史がまだ至妙の域には達しておらず、酔った時と醒めた時とでまだ調子が変わるということである。王羲之などは酒の力を借りることなど決してしなかった。とはいえ、吾輩にしても、そこからまだ足がぬけていないのである。」

この作が刻されている〈成都西樓帖〉（東坡蘇公帖）が本来の帖名）は、成都の汪応辰が、蘇東

坡の書を集刻したもので、南宋の乾道四年（一一六八）に完成した。偽跡はなく、いわば蘇東坡の書の精品全集として尊重されてきたが、完本は現存しない。有正書局の石印本がある。

唐代の詩人たちとちがつて（白樂天のように在世中に詩集が行われていたのは特例）、蘇東坡の場合、生前すでに自分の詩集が世に公刊されていた。彼が黃州に流されたのも、ひろく世の知識人に読まれていた詩集の中に、皇帝を誹謗したとされる「証拠物件」としての詩があつたからである。蘇東坡が世を去った七十年後に、南宋第二代の孝宗から文忠の謚を賜わり、知識人たちは堂々と彼の詩集を読むことができるようになった。それまでは詩集を所有してただけで、憲官に逮捕されることもあつたという。

乾道四年に集刻された〈成都西樓帖〉は、蘇東坡が正式に名譽を回復する直前に、郷里四川の汪氏の熱意によつて完成したものの。詩の普及と同じく、後世における書の普及の上で一定の役割を果たした專帖である。なお、文忠の謚を賜つた孝宗皇帝は、みずから蘇東坡の信奉者であつた。紺碧色の絹本に金泥を用いて規格正しい草書体で書いた孝宗筆（後赤壁賦卷）が遼寧省博物館に伝えられている。